

所属・資格 中国語中国文化学科・教授

申請者氏名 三澤 真美恵

研究課題		歴史事件の記憶をめぐる劇映画とドキュメンタリー映画——『セデック・バレ』と『餘生』
報告の概要	研究目的 および 研究概要	平成29年度の研究課題「台湾の移行期正義とドキュメンタリー」では鍵概念である「移行期正義 (transitional justice)」を台湾ドキュメンタリーの展開に即して検討し、平成30年度の研究課題「出来事としての映画『セデック・バレ』を考える」では「移行期正義」のなかでも重要な課題である台湾先住民族の歴史表象に関わって、社会現象ともなった劇映画『セデック・バレ』について考察した。本年度は、劇映画『セデック・バレ』と同様に「霧社事件」をテーマとしつつも、事件後に生き残った人々に焦点をあてたドキュメンタリー映画『餘生』を、劇映画『セデック・バレ』と表裏をなすものとして両者の歴史表象を比較しつつ、過去二年度の課題を架橋する方向で、移行期正義下の歴史記憶の形成と映画の実践について考察してみたい。
	研究の 結果	「霧社事件」後に生き残った人々に焦点をあてたドキュメンタリー映画『餘生』について、湯湘竹監督にインタビューを実施した。その結果、日本の植民地統治下および戦後の国民党政権下において、生き残った人々とその子孫の間に、事件による感情的な溝が生まれていたこと、事件を語る「発話の権利」をめぐる、非対称な状況が存在したことなどが具体的な様相と共に理解できた。
	研究の 考察・ 反省	湯湘竹監督は同作では「和解」の可能性が語られているという。そこには、民主化後の台湾で進められている移行期正義の議論が影響していると思われる。また、同監督が劇映画『セデック・バレ』にも録音技師として参加していた経験からも、『セデック・バレ』と『餘生』が映画における「霧社事件」表象の表裏をなすものとして捉えられる傍証を得た。しかし、両者の歴史表象を比較するという課題については、十分に行うことができなかった。この点については、移行期正義の議論をふまえた歴史記憶の形成と映画の実践というテーマに即して継続的にについて考察してみたい。
研究発表 学会名 発表テーマ 年月日/場所 研究成果物 テーマ 誌名 巻・号 発行年月日 発行所・者	<p>※この欄は、本報告書提出時点で判明している事項についてご記入ください。</p> <p>湯湘竹監督インタビュー「最良の部分は永遠にレンズの外側にある」 楊家雲監督インタビュー「アマが生きた真実の記録を残す」 吳秀菁監督インタビュー「他者の生命をテキストにする責任」 以上、すべて『中国語中国文化』第16号（2019年3月25日、発行：日本大学大学院文学研究科中国学専攻・日本大学文理学部中国語中国文化学科）「台湾ドキュメンタリー映画監督インタビュー特集」に掲載。</p>	